

2017 ワールドゲームズ・ヴロツワフ（ポーランド）大会レポート

4年ごとに開催される、オリンピックに次ぐ世界祭典、ワールドゲームズ。今回は7/24-26間で、ポーランドのヴロツワフにて開催されました。（ワールドゲームズ全日程は7/20-30）

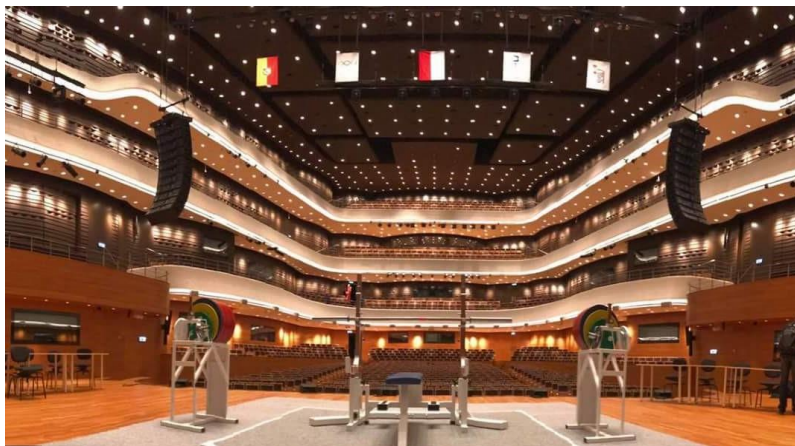
通常の世界選手権と異なり、開催階級は男女各4階級（軽・中・重・超級）であり、絶対重量ではなくフォーミュラスコアにて争われます。また出場権獲得は国別予選ではなく、前年度世界選手権における大会結果（体重別階級各3位まで）と、前述選手を除く開催クラスごとにフォーミュラスコア上位各4名が、世界パワーリフティング連盟による指名によって出場が決定される特別な舞台です。

また、開催期間中には同様に他競技団体含めて31競技・42種目の世界トップクラスの闘いが各会場にて繰り広げられていました。同団体競技の選手は同じ宿舎に宿泊し、食事開場等も含めて共用の場所では、他競技団体代表の日本代表選手や、パワーリフティングだけではお見掛けしない各国代表選手とも遭遇し、普段とは一味違う異文化コミュニケーションを図っていました。

パワーリフティング競技にとっても世界最高峰レベルの祭典に参加した、今回日本選手団の7名の活動記録として、以下に手記を取り纏めました。どうぞ最後までご拝読いただき、実際の舞台での臨場感をお楽しみ頂ければ幸いです。



今回の日本選手団 + Gaston 会長



試合会場内部。素晴らしい舞台が用意された



壮行会での模様。鈴木大地スポーツ庁長官と



いよいよ開幕で機運も盛り上がってきた

【今大会結成の日本選手団】

女子軽量級	福島 友佳子
男子軽量級	佐藤 義宏
男子中量級	濱田 展行
男子中量級	大谷 憲弘
ヘッドコーチ	本宮 健司
アシスタントコーチ	小笠原 拳士郎
監督 兼審判員	阿南 喜裕



今回の試合会場外観



宿舎正面

(以下、各参加者の投稿原文より)

女子軽量級 福島 友佳子

『ありがとうございました』

2001年に開催された、ワールドゲームズ秋田大会の初出場から今回のポーランド、ヴォロツワフ大会で5回目の出場となりました

これは全競技のなかで日本人選手の最多出場となります

ワールドゲームズは第2のオリンピックといわれ4年に一度開催されます

回を増す毎に大会の規模が大きくなりまた日本メディアの注目度も上がってきたように感じました
今大会の会場は立派な音楽ホールでした

ステージ後方には大きなスクリーンがあり何台かのカメラで試技だけでなく選手やセコンドの表情など映し出して観客席から見ても選手の意気込みが伝わる迫力のある演出でした

またアップ場には1人一台の試合と同じエレコが用意されていて、ワールドゲームズ特有の20分間アップもスムーズにできました

これは過去にもなかったことなので本当に助かりました

試合内容ですが

スクワット 185キロ

ベンチプレス 135キロ(M1世界新)

デッドリフト 165キロ

トータル 485キロ(M1世界新) 657.9ポイント

ライトウエイト級で銀メダル、ベストリフター2位でした

4年間目標としていたメダルを取る事ができました

これも、阿南監督が事前にライバル選手の分析をデータ化し、駆け引きが一目瞭然にわかるような表を作成していただき、的確なアドバイスを常に送ってくれたおかげです

またご自身が翌日の試合を控えてるのに全身全霊で私のセコンドをしてくれた大谷選手、海外自体が初にもかかわらず細やかに動いてくれた小笠原さんには感謝の気持ちでいっぱいです

そして、何時も優しくサポートしてくれた、最強で最高の日本選手団のみなさん、日本から熱い応援をしてくださった皆様、本当にありがとうございました



試技直前の場面

(左)女子軽量級でも(右)ベストラフターでも 2位を獲得

男子軽量級 佐藤 義宏

7月24日～26日の日程でポーランドで開催されましたワールドゲームズに参加してきました。通常の大会は男子8階級に分類されるのに対し、本大会は4階級に分類され体重に対する係数を挙上重量に対して乗じたポイントで競いました。

結果は男子軽量級 8位 入賞

スクワット 265キロ (PB275キロ) 9位

ベンチプレス 215キロ (PB220キロ) 2位

デッドリフト 235キロ (PB247.5キロ) 9位

トータル 715キロ (732.5キロ) 8位入賞

■所感

会場はこれまで出場したどの世界大会より豪華な場所で、ウォーミングアップ用のラックに関しては選手1人に1台と、こちらも通常では考えられない程の恵まれた環境を用意して頂いた最高の舞台でした。

このような最高の舞台に、最高のセコンドについてもらい試合に臨みましたが、思い描く結果を出せず不完全燃焼となり、8位という結果で終わりました。

原因として考えられる点としては2点あります。

1点目は、『試合を楽しむ』という感覚がなかった点です。最高の舞台が用意されたことによって、雰囲気や緊張するという事はありませんでしたが、いつもなら『試合を楽しむ』という感覚があるのですが、今回は種目間が20分と短く、選手も9名と少なかったためその余裕を持てなかったことで動きや、感覚の調整ができなかった事です。

また、もう1点としては、自分の心構えになります。競技を始めてから約15年間これまで記録を停滞させてことがなく、常に更新してきていたので、自分の中で新しいことへのチャレンジ、食欲がいつの間にか欠けてきたのではないかと。という事です。現にワールドゲームズ前週に開催された全日本では2位という結果となっ

った事がそれを物語っていると思います。

今回はセコンド、仲間、協会関係者含め、多くの方に応援やサポートをして頂いたにもかかわらず、結果を残すことが出来ず、大変申し訳ございません。

次回出場する国際大会がいつどこになるかわかりませんが、今回のワールドゲームズで更新し損ねたベンチプレスの世界記録と、更なるトータルでの自己記録を更新したいと思いますので、引き続き応援の程よろしくお願ひします。



ベンチプレス世界記録へ挑む



試合以外ではいつも笑顔が絶えない

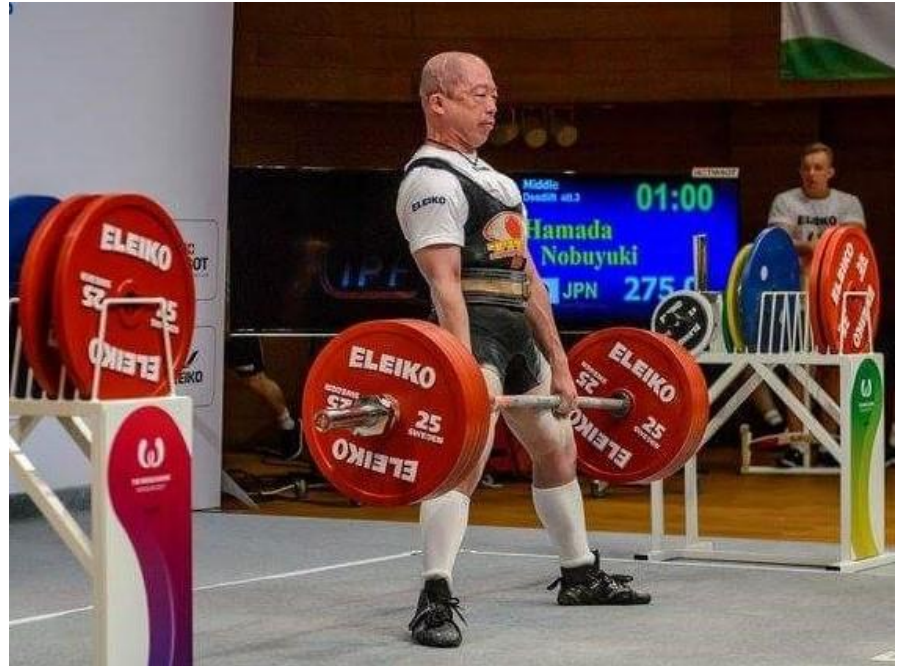
男子中量級 濱田 展行

今回ワールドゲームズに初めて出場させていただきました。代表選手に選出されただけでも名誉なことですが、選ばれたからには出場ただけで満足して帰ってくるつもりはなく、メダル獲得を最終目標と定め、そしてそれを実現するために必要なトータルの数字、そのトータルを実現するために必要な各種目の数字を個別の目標として決めました。昨年の世界大会の結果から考えてメダルを獲得するには最低でも845。自分の記録が800。各種目でベストを10kg更新し、試合では9本パーフェクトに成功させてやっと達成できるという、かなり厳しい数字ですが、今年1月にこれを目標として練習をスタートしました。

結果はメダルには遠く及びませんでした。せめてベンチのM1世界記録の更新をと思い、これは達成することができましたが、終わってみるとさすがに世界中のリフターが目標とする大会、上位の選手は想像以上に記録を伸ばし、メダル獲得にはトータル870は必要でした。自分はまだまだ修行が足りません。しかしこの大会で得たものは多かったです。大会を支えるボランティアはみないきいきと選手をサポートし、会場は今まで参加したどの大会よりも素晴らしく、世界最高峰の大会にふさわしいものでした。最後のデッドを引いた時にはもうこれで終わってしまうのかと思い、ダウンのコールがかかってもしばらく引ききったままの状態会場を眺めていたぐらいでした。全てが素晴らしい大会でした。そして何よりも素晴らしかったのは日本選手団のチームワーク。コーチ陣が万全の準備を整えてくれたおかげで選手は自分の試技に集中することができました。感謝の言葉しかありません。そして、ヴロツワフ大会は終わりましたが、4年後、再びこの素晴らしい舞台に戻ってきたいという気持ちが、今自分の中にあります。ですから、これからもますますパワーリフティングに励んで行きたいと思っています。



我が生涯に一片の悔いなし！



デッドリフト第3試技を引き切って見事成功

男子中量級 大谷 憲弘

まずは、ワールドゲームズ出場に係わった多くの関係者の方々に深く感謝致します。今大会における私自身の凡庸な結果は真摯に受け止め内省しております。今後は、この得難い経験を活かして日本のパワーリフティング発展に寄与すると共に競技者また、指導者としても精進して参ります。さて、ワールドゲームズでのパワーリフティング競技大会は会場の素晴らしさに選手一同が驚嘆し大いに気分を高揚させました。具体的に言えば、世界的なクラシックやオペラを演奏するコンサートホールでの会場設営やワールドゲームズ仕様シャフトやラック、ベンチプレス台、プラットフォーム等の機材、また、一人1台の機材を与えられ10台の機材が並ぶウォーミングアップ場など壮観な環境でありました。さらには、世界の錚々たる顔ぶれが揃い繰り広げる試技はこの舞台に立てたことを誇りに思わせてくれました。私が次のワールドゲームズに出場し勝ちたいと言うのは言を俟たないが、若手選手を育成し同じ舞台に立たせることも経験者の使命だと考えています。



試技前に集中する様子



大谷選手の得意種目・スクワット

ヘッドコーチ 本宮 健司

第二のオリンピックとも呼ばれる栄誉ある大会に恐縮ながら日本チームのコーチとして参加させて頂きました。

先ず感じたのはワールドゲームズ大会のスケールの大きさでした。市街中心部に屋外特設会場が設営がされ、昼間は各競技の Live を大型スクリーンに映し出し、夜は盛大にクラブパーティーが催される等、街全体がワールドゲームズ一色に染まっていました。

その会場の直ぐ近くにあったパワーリフティングの会場もとても立派なコンサートホールで、アップ場も ELEIKO 10 台が用意されるなど、桁違いの厚遇は偉大なる Olech Jaroslaw 選手率いるポーランドパワーリフティング協会の尽力のお陰と思われます。

最高の舞台で日本チームに良い結果が残せる様に準備する事が裏方の役目であり、出発前に阿南団長から直々に基本ルール及び駆け引き、ライバル選手のデータ分析等をご教示頂きました。

また試合当日に選手 T シャツが ELEIKO を使う事になったりとイレギュラーはありましたが、「世界大会では何があってもおかしくは無い」と過去のエピソードを踏まえ、小早川代表からも心得を教えて貰っていたので焦らずにいられたのかと思います。

反省点としては、スクワットの判定に対しての抗議に躊躇してしまった点があり、経験の浅さが出てしまったところは改善すべきと強く感じました。

色々な場面を想定した抗議の仕方をシミュレートし、よりスマートな抗議を心掛けていきたいです。

今回の貴重な経験を活かし、日本チームの更なる活躍をサポート出来る様努力していきたいと思ひます。

最後に、JPA 始め関係者、選手の皆様には大変お世話になりました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。



今回は佐藤選手・濱田選手のメインセコンドと、セコンド業務の統括において活躍された

アシスタントコーチ 小笠原 拳士郎

今回大谷さんのメインセコンド、福島さんのサブセコンドをした小笠原です。

今回初の海外、世界大会を経験し今までにない経験をする事が出来ました。

私自身パワーリフティングを競技として始めたのが今年からで選手、セコンドとして経験も浅く不安なこと・分からないことも沢山ありました。

今回のワールドゲームズの 1 週間前に行われた全日本大会がセコンドとして初めて出場した大会でした。この

大会で大谷さんのセコンドをし、試合の流れやセコンドに必要な能力などを知ることが出来ました。そこから1週間は全日本の反省をすると共にワールドゲームズに向けて改めて準備を行いました。初の海外、世界大会ということで大会の他にも飛行機や言葉など不安なことも沢山ありましたが無事ポーランドに到着し大会に挑みました。

大会では初めに福島さんのサブセコンドを行いました。今回のワールドゲームズではアップ場に1人1つのラックがあり自分のペースでアップをすることが可能でした。ただ1つのグループが10人で回るので試技・種目の間が短く疲労を残したまま次の試技になってしまうということもあり記録を落としてしまう選手もいてこれが世界大会なのかと思いました。その中でも世界二位になった福島さんは本当に強かったです。セコンドとして携われたことはとても勉強になりました。

次の日に大谷さんのメインセコンドを行いました。全日本の時の反省を踏まえてセコンドを行いました。アップ場が広がったおかげで自分達のペースでアップが出来たのは助かりました。スクワットでは判定が割れて厳しい判定があり1試技と3試技が赤になってしまいました。全日本や普段の練習で大谷さんのことをいつも見ていたので調子は良さそうでしたが今回の判定は厳しいように感じました。ベンチプレスではスクワットからの回りが早く疲労が回復しないままのアップ・試技となりいつもの試技が出来ず、1.2試技を落とし、3試技をきっちり取りに行くという展開になりました。スクワット終わってからあつという間のベンチだったのでここも日本とは違う環境で結果を出さなければいけない世界大会の過酷さを感じました。デッドリフトではミスも少なく確実に取りに行きました。大谷さんの試技が終わり、狙いに行っていた数字を取れずにとっても悔しかったです。

今回のワールドゲームズではとても貴重な経験をする事が出来ました。今回の経験を選手、セコンドとして生かしていきたいです。今回のワールドゲームズを通し日本出発前から準備して頂いた協会の皆さん、そしてセコンドとして貴重な経験をさせてくれた大谷さんにはとても感謝しています。自分自身選手として今回の経験を生かし来年、再来年の世界ジュニアに出場出来るように日々成長していきます。



福島選手・大谷選手のセコンドとして、諸先輩方から多くを教わった様子

監督 兼審判員 阿南 喜裕

今大会参加に関して心掛けたことは大きく3つあった。

1. 肩書に見合った（名前負けしない）言動と円滑な統率
2. 選手団への最大限のバックアップ
3. 審判員としての日本の立ち位置の誇示

1.に関しては、世界オープンでの参加経験が私より遥かに多い選手達と、海外遠征は多いものの世界最高峰の舞台は未経験の私との間に、いかに信頼関係を築くかに重点を置いた。今大会の自身で定めたスローガンは“TEAM JAPAN”である。未だに対外的にも身内の中でも、パワーリフティングは「個人競技」としての認識が非常に強い。確かに、皆が注目スポットライトを浴びるプラットフォームに立って、その瞬間の最高の演技を

するのは、選手個人に他ならない。だが、そこに至るまでのコーチング・ウォームアップエリアでのサポートや、プラットフォームまでの花道で最後に背中を押す、チームとしての力強さは、ただ一人で登壇するそれとは比にならない。全員理解しているのは十分承知の上だが、4年に1回しか結成されない選手団だからこそ、敢えて選んだスローガンだ。そのために、今回は選手団として選考はされなかったが、昨年の世界選手権でチームキャプテンとして尽力いただいた小早川選手や阿久津選手、ベンチプレッサーではあるがあらゆる日本選手団と繋がり強い児玉選手にも協力いただき、種々のツールを使いながらもコミュニケーションを密に取りながら結束を深めていくことができた。ご協力いただいた各氏には、この場を借りて御礼申し上げます。

2.に関しては、技術委員長として、国際審判員として、かつ岡山大学での元指導者として長らく活動してきた今までの知識経験をコーチングスタッフにお伝えするために、基本から応用までのルール習得や、駆け引きの場面におけるシミュレーション等、即時の判断力を養うトレーニングを実施し、各資料を通して習得を目指した。また、実際のセコンドワークの中で、現状のスコア変動を可視化させるため、電卓ではなくスマートフォンを使用しながらエクセルで入力可能なスコアシートを作成し、即時手元でスコアシートを確認し適切な重量選択を可能にした。出場選手も含めて全員には、自身も含めて各ライバル選手の過去戦績データを集約し必要な分析を掛けることで、当日の戦略・戦術を立てる参考指標としていただいた。

3.に関して、実は選手だけではなく、今回参加する審判員も、過去の大会での審判員としての活動実績をもとに、I P Fから招集されたメンバーである。いわば審判員としても世界最高峰クラスの闘いの場であった。その分、やはりルールの理解度に対しても、判定技術に対しても、実務上の言動に対しても、今まで経験したどの大会のレフリーチームより連携がスムーズで、周囲の実務レベル自体に違和感なく着任できたのは貴重な体験。自己評価としては、今回招集された全23名のレフリーの中では、中の上あたりかと。世界にはまだまだ優秀なレフリーが大勢いると実感した。今大会全8セッション中、陪審員2、サイドレフリー1、テクニカルコントローラー2、計5セッションを担当させていただき、実に充実した経験・時間を過ごせ、自身のレベルアップのためにも大変勉強になった。今後としては、まだまだ不足する語学力を強化し、より円滑にコミュニケーション能力を発揮できる様努めたい。



今回招集された全審判員の面々



最終セッションの観客席の様子

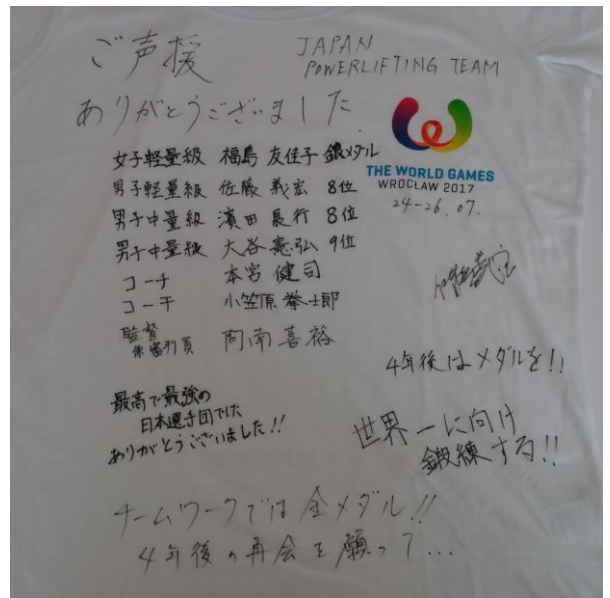


今回はチーフレフリー以外すべての業務を担当。なお陪審員は5名構成





2日目試合後には市街地を皆で散策、ささやかな慰労会を行った



全員無事に帰国、遂に解団。4年後の再集結を誓い合った

今大会に参加した7名は、選手、コーチ、審判員として現段階における日本A代表格、いわば日本におけるパワーリフティング界の“シンボルパーソン”である。それぞれが自身の立ち位置を理解し、代表たる振る舞いと、競技発展に対する更なる貢献という役割を各地で十分に果たしつつ、4年後の結団の際には、今回のメンバーも含めて、更なる最強布陣の日本選手団として再集結することをお互いに誓って今回の選手団を解団した。このメンバーの今後の動向を注目していただき、全員がこれを達成することを願う。

(全文編纂、文責)

選手団監督兼任審判員・JPA 技術委員会委員長
阿南 喜裕